私の失敗

大崎　利恵子

はじめて子どもの前に立ってから、もう一年経ったとは、とても信じられない思いですが、保育者としては、まだたった一年の新米の私です。失敗を数えていたら増刊号ができてしまうのではないでしょうか。

あわてんぼうの私は、早とちりをしてしまい、てっきり、けんかをしていて下じきになっている子が、上の子にやっけられているのだとばかり思い込んで「さあ、あなたたち、お口で話してちょうだい」、なんていったとたんに「ばかな先生、ぼくはウルトラマンなんだよ」と下じきになっていた子からはね返ってきて、内心びっくり！　でも平然と「あらそうだったの。それじゃ、本当にやっつけないようにやってね」などとすましてその場を去ってみたり、みんなに配ろうとして持っている本を落として、子どもに笑われたり、子どもの名前を大きな声でまちがえて呼んだり、本当に細かい事はいくらでもありますけれど、中でも忘れられない出来事が、いくつかありました。

ある日、身体があまり強くなく、休みがちのI男が宿かりを持って来た。「なになに？」とみんなが寄って来る。ふだん友だちに囲まれるような事の少ない彼は、「宿かりだよ」とぽつんと答える。かごの中から机の上に出してあげると、チョンチョンと指で貝がらをつっついてみる。I男は生き物が好きでよく接しているので平気でつかんでみせる。それを見て、みんなもI男に勇気づけられてか、つかみはじめた。

I男はすっかり中心になって「だめだよ」とか、「そっちのをやれよ」、などと指示をしている。それに慣れると、数人の男の子たちが、今度は手のひらにのせて遊びはじめた。「ほら

見て、何ともないんだよ。平気だよ」I男は生き生きと訴えてくる。「まあ、くすぐったくないの」と内心、先生もやって、と言われたらどう言ってのがれようかと思いつつも言葉を返していた。「おしまいにする時にはしまってあげてね」と言い残して他の子の所には私は移った。

ところが、しばらくすると「先生いたいよう」とI男が悲鳴をあげながらとんできたのだった。「どうしたの」と言いながらI男の手のひらをみると、なんと、宿かりがしがみついている。生き物に対して何となくこわさをもつ私のその時の驚きと言ったら何とも説明がつかない。その手のひらにしがみついている宿かりを見つめて「どうしよう、どうしよう」と心の中でくり返す。I男は目に涙をうかべながら「いたいよ」と私を見つめる。ひっぱった所でとれるはずはないし、かみついている（？）のだから、ひっぱればかえっていたい。まだ経験の浅い私は手だてを知らないのでどうしようもない、何事につけてもまず相談しにいく先輩の先生（幸いにもろうかをへだてた前のクラスである）の所にとんでいって「どうしよう」と聞く。その時のI男の気持ちを今思えばなんとも心細かっただろうと思い、申しわけない気持ちになる。先生に言えばよいと思っていたにちがいないのだから……。

「水をかけたら」というアドバイスを受けて、じゃ口から水をかけてみるがびくともしない。その時の私にもっと落ちつきがありさえすれば、バケツの水につけて時間をかけたのだろうに、そんな余裕はまったく皆無の状態である。水を少しかけてもだめとなって、またまたどうしようもなく、I男の手をひくと、職員室の主任先生の所にひっぱっていくことにした。その興奮を今思えば、本当に笑い話だけれども、その時は真剣だった。「もうすぐとれるからね、もうすぐよ」と言いながら、途中でI男のくつが片方ぬげてしまうほどのいきおいで、彼をぐんぐんとひっぱっていった。I男の方が落ちついていたのか「先生、くつが片方ぬげた」と訴える余裕をもっていた。にもかかわらず、信じられないことだけれど、私は「あとでひろえばいいわよ」とひっぱったのだった。

職員室の戸をガラッとあけると「先生！」とどなる私、びっくりした表情の主任先生、「I君の手に宿かりが…」と言うか言わぬかのうちに、「そんな大きな声を出さないの！」という声がはね返って来た。「はっとして我にかえる」とよく言うが、まさにそのとおりで、私はそれを聞いたとたんに自分をとりもどした。主任先生は落ちついてI男の手をとると「さあ、もう大丈夫よ」とまず彼を落ちつけ、さらに泣くのをやめるように話をしている。そのようすをみて、やっと冷静さをとり戻しはじめた私は「もう大丈夫ね」と、ひと言いうのがやっとだった。

保健室でカンフルをざあざあかけると、あんなにしっかりとしがみついていた宿かりが落ちて、死んだ。I男の手のひらには、小さなあとがくっきりとついていた。

保育をはじめて、たった一ヵ月しか経っていなかった私にとって、はじめて出合った非常時であった事は疑うまでもない。頭で思っている事と、実際の場面に当たって動く事が、いかに一致していないかという事を自ら味わった出来事だった。

それにしても、大きなけがでなくてよかったと思うと同時に、何か起きた時、適切な処置ができないのでは、一人前ではないということをしみじみと感じ、こうした経験を積み重ねていくことがまず才一歩だなと思われた。この次、何かあったら、まず自分が落ちつくことにしようと自分に言いきかせた。ついでのことに、この宿かりの運命について述べておくと、すっかりびっくりぎょうてんしてしまっていた私に、水をもらいそこねて、あわれ、翌日には全滅してしまっていた。I男には、本当に申しわけない事になってしまったが、二人でおはかを作りうめてやった。

まず自分が落ちついて、適切な処置をという決意をためされる才二の事件は、遠足の途中に起きてしまい、なんと、その時も落第してしまったのである。

よく晴れた明治神宮の宝物殿前、つきそいのお母さんたちとお昼を食べて自由に遊んで、さあ、もう帰りましょうという事で、クラスの子たちを集めて歩き出した。ご存じの方も多いと思うけれど、あそこの池の端は細いみぞになって流れている。そこをみんなでとびこえていこうという事になって、ぽん、ぽんとまずは男の子がほとんど、飛びこえて来た。あと数人の女子だけという時に、みぞを前に立ってみていたM子があっという間に、そのみぞに落ちてしまった。どうやら、となりの女の子がふらっとしてM子の背中につかまろうとしたらしく、用意していなかったM子が落ちるはめになってしまったらしい。

細い小さなみぞだから、落ちても、くつとくつ下だけで済むのだが、不運なことに、M子はその中でころんでみぞにそって横になってしまった。つまりは右半身がずぶぬれ、びっくりしてひきあげる私、頭から落ちる水しずくをハンカチでふきながら「かわいそうに、もう大丈夫よ」とくり返しながら、私は内心「おちつかなくちゃ」と、まず思った。しかし、本人は落ちついているつもりでも、その実、ぬれた顔をふくばかりで、ぬれた服をさっさとぬがすことはちっともしていなかったのである。そしてその時またまた主任先生に助けられ、「早くぬがしちゃいなさい」という声、はっとして、ランドセルをおろし、やっとぬれた上着をぬがした。そして、まだぐずぐずしている

と「もうまかせて、あなたは自分のクラスの子を連れていきなさい」と言われ、みんなは、とみると、いたずらぼうずたちはさっさと自分たちであちこちに出張してしまっている。大きな声で呼び集め、才一の集合地点まで行く。ところが、しっかりしているつもりは自分だけで、結局私は動転していたらしく、なんと一人おきざりにしていた。あとから来る先生が連れてきてくれた時には、その肩を抱いてしみじみとながめてしまった。そのことで、自分の動転に気づかされたためか、次の集合地点に行くまでの調子のおかしかったこと、まさに気もそぞろだったのかもしれない。子どもたちは敏感なもので、ただでもさわいでいる子がいる所に、帰り道だし、うかれて来ているし、もう、ガヤガヤワイワイ、あっちへいったりこっちへいったり、友だちにぶらさがったり、まったく私の気持ちもしらないで！

結局、一度とまってみんなに話をする事で自分も落ちつけて、今度はさっさと歩き出せば調子よく、無事に地下鉄までたどりついた。

いろいろな事を経験して、子どもたちが成長していくように、保育者もまたしかりであり、何度か経験していくうちに、自然とどうすればよいか判断できるようになって、あわてなくても済むようになるのではないかと、今は、今後の自分にがんばらなくてはと、言いきかせるばかりである。毎日の保育には、本当に何か起きるか、まったく予想もつかない事がひそんでいる。宿かりにかみつかれたとか、小さなみぞに落ちてぬれた等というささいな出来事しか起きていないから、こうして笑い話ですまされているが、こんな事ですら、これだけ動転してしまう私だから……と考えると、ぞっとしてしまう。毎日の生活におこたりなく注意をはらって、ある意味ではけがをおそれて禁止が多すぎるぐらいに慎重派にならざるを得ない私である。そのうち、何があってもどんとこいという気持ちをもって、ダイナミックな活動を展開できるようになれるかもしれない。むろん、その時だって、けがをないように綿密な配慮が大切である事は変りないが……。

さて、数々の失敗の中にも、その失敗が偶然にもすばらしい結果を生み出してくれた出来事があった事も、忘れられない事の一つである。

わがクラスには、耳が悪かったために（この事もあとでわかった事なのだが）ことばがはっきりしなかったり、集団に入れなかったりで、外見的には、自閉的に見えていたK男といえ子がいる。おべんとうも、進まない時にはひどくおそく、その日もまるで食べないで遊んでいた。私が担当してからも三度目で、降園時間が来てしまい、しかたがなく、彼だけ残す事にした。

他の子を送り出すのに、彼を職員室に連れていくべきであったのだが、その前までに一人で平気だった事もあって「先生はすぐもどって来るから、それまでに食べちゃっていてよ」とほんの数分のつもりで、おいて出てしまった。何と冷たい事をしたものだと思うけれど、それまでの彼はそんな事、まるで平気だったので、本当に、ついうっかりしてしまったのだと思う。

玄関に出て、他の先生に事情を話して頼んでもどろうとした時、お母さんの一人が他の先生に「二階の窓から子どもが呼んでいる」と教えてくれていた。私はその言葉をうしろで聞きながら、部屋に走りもどっていた。そして、部屋についてみると、何と彼は、二段になっている下の窓わくに足をかけ、その上の窓から上半身、完全にのりだしているではないか。「K君！」と叫ぶと、とにかくひきずりおろした。そして、また驚かされた。彼は、わあわあ泣きながら私を呼んでいたのである。何もいわずに彼を抱くと、彼の涙はすぐとまった。

「先生のことを呼んでいたの？　どうしたの？」と聞くと「目がいたかったけど、もうなおっちゃった」とまわらない口で話すK男、「そう」と言ったきり何もいえない。彼がすっかり落ちついたので「もうおべんとうたべちゃった？」と聞くと、彼はさっさと食べだした。すぐにたいらげてしまって帰る仕たくをする。したくが終わってから、目の事は口実だと思ったけれど一応たしかめ「先生の事を呼びたかったのはわかったけど、窓にのって呼ぶのだけはもうしたらいやよ」と話だけはした。しかし、話をしながらも、一人残された彼の気持ちを思うと申しわけがなくて涙が出そうで困ってしまった。私が悪かったなという気持ちでいっぱいだった。外面的には何の変化もなかった彼だが、窓からのり出して泣き叫ばせるだけの何ものかがK男の心の中で芽ばえていた。とにかく、その時私が抱きとめた事で、私と彼とのきずなができた。感情を出す事の少なかった彼と私がはじめて心でぶっつかる事ができた瞬間であった。すべてがよい方向で結果が出たからよかったけれども、もしあの時…と考えると足がすくむ思いが今でもする。その後、K男は問題は多いけれど、甘えるようになり、さまざまな面で変化してきている。

毎日毎日、あの子がこうした、この子があんな事を言ったと、ささいな事に一喜一憂して自分の保育を反省したり、学んだり、失敗も成功も、何もかもが私を一人前の保育者に育ててくれる大切な材料であることを今、つくづくと感じています。やっと一年！　まだまだ、これからが本当の勉強なのかもしれません。この終りのない道をどこまで歩み続けられるか、がんばりたいと思っております。

（文京区立汐見幼稚園）